

論 叢

唐音語の研究と其實例五則

中山久四郎

近世支那文化の我國に及ぼせる影響の一として注意すべきものは、「唐音」なり。

唐音とは、廣くいへば唐土の音即ち支那の漢語字音の義にして、狭くいへば「唐音」「宋音」「元音」「明音」「清音」等の場合の如く、大體支那歷朝の時代によりて區別する所の漢語字音の分類の中、特に唐時代の音の義となるものなり。

されども、又所謂漢音吳音の我國に傳はりたる後、世々の往來によりて支那語の當時の字音のまゝに傳はりたるを（宋、元、明、清などの時代を分たず）すべて唐音と稱す。やゝ精密にいへば、宋、元、明の頃、彼國に留學せし我國の僧侶及び我國に歸化せし彼國の僧侶、或は宋、元、明、清時代の商人の博多、堺、長崎等に來りし者の傳へしものにして、支那字音のまゝ、或はその轉訛ま

たは省略(或は簡略)したる音にて稱呼せらるゝものなれば、漢語の普通の日本漢字音にて稱呼せらるゝものとは自ら異なりて、外來語の一種とも見るべきものなり。言ひ換ふれば、近世支那より傳來して、支那音のまゝ、或は之に近似せる音のまゝに用ひられて、外來的の原素を保ちつゝ日本語化したるものなり。

故に之を研究することは、即がて近世に於ける日本人と支那人との往來交通の影響が如何に字音言語の上にあはれたるかを知らんとし、或はまた近世支那の文化が如何なる影響を我國に及ぼしたるかや字音言語の上より觀察することゝもなり、又之に伴ふ所の支那の風俗習慣等の傳來を研究すれば、ます／＼近世支那文化の我國に及ぼしたる勢力影響の多大なりし事をも明にし得べきものなり。

但し今此一短篇に於ては、たゞ唐音語の數種について研究したる所を斷片的に記すこととし、又後日の好機に於て愚見を述ぶることゝせん。

### (一) チャンコロは「中國人」の支那音か

支那人を呼んでチャンコロといふものあり。其語源明ならず。蓋し中國人(チュンコーデエン Chung kuo tjeu)の轉訛なるべし。若し果して然らば支那人をチャンコロとよぶこと、決して輕蔑の義なきのみならず、寧ろ一種の敬稱ともいふべきものなり。別に説をなすものあり。曰く是れ清

國鱸(チンコーロオ、鱸は鱸鰻の略にして、無賴漢の義なりといふ)の轉訛ならんと。後説ならばやゝ輕視の義あるに似たり。後説は「臺法月報」第十三卷第九號掲載、東方義孝氏の「本品人先づ自ら言語を改めよ」の説の一節によるものなり。

### (二) 子(ス)の音につきて

アンズ(杏子) イス(椅子) センス(扇子) の如く、子の字を宋音または廣義の唐音にて呼ぶものと同類の名辭を集めたるに左記の如く五十四語あり。

杏子(アンズ) 椅子(イス) 印子(インス) 茄子(キヤス) 金子(キンス) 銀子(ギンス)  
庫子(クス) 鐘子(クハンス) 冠子(クハンス) 卷子(クワンス) 裙子(クンス) 鎖子(クンス) 裙帽子(クンモウス) 下子(ゲス)通常下司 瓠子(コス) 庫子(コス) 昂子(ゴス) 坑子(コス) 縐子(シユス) 朱子(シユス)近來誤用 鑷子(スウス) 扇子(センス) 船子(センス) 臺子(ダイス) 提子(ダイス) 檐子(タンス) 段子(ダンス) 團子(ダンス) 彈子(ダンス) 枕子(チンス) 豆子(ツス) 又(ズス) 鈍子(ツイス) 提子(デイス耶蘇) 凳子(テンス) 緞子(ドレス) 帽子(バウス) 辨子(バンス) 附子(フス) 蚊子(ブンス) 襪子(ベッス) 拂子(ホッス) 帽子(マウス) 網子(マウス) 迷子(メイス) 目子(モクス) 花綾子(モンリンズ) 様子(ヤウス) 柚子(ユズ) 鷄子(ヨウス) 絡子(ラス) 綾子(リンズ) 綸子(リンズ) 婁生子

（ルサンス） 王子（ワンス）

以上五十四語の中、杏子、椅子、金子、卷子、扇子、緞子、拂子、様子、柚子、綸子の十語の如きは、尤も普通に行はるゝものなり。子の字の唐音の實用範圍小ならずといふべし。

近來繻子の二字の代りに朱子の二字を以てし、新聞廣告などには、朱子足袋などゝあり。朱子と書きてシユスとよめざるにはあらざれども、宋の朱子の名稱を瀆すものゝ如き感あり。

（三）いてふの語源につきて

次にいてふの語原につき、人多く一葉の約と云ふ。言海にも「一葉の約と云」と記したり。

然れども、是はむしろ鴨脚樹といふいてふの一名の唐音より起れるものなりと見るべきにあらずや。鴨脚の二字の支那音は

鴨 ya 脚 chio or chü

なれば、少しく轉じて、いてふとなること不自然にあらずと思はるるなり。此ことは臆測を以て言ふに非ず。横島昭武輯の和漢音釋書言字考節用集（元祿十一年編輯者自序、初刊の年は明ならず。

享保二年再刻、萬延元年三刻なり。）卷六の生植門の イ伊 の部に

銀杏イデナ一名白果 鴨脚イデナハ見格物論活法（キ幾の部には銀杏ギンアン出伊）

とあり。柴貞穀の雜字類編の 以類 の植物の部にも

鴨脚子。銀杏

とあり。又高井蘭山の俳字節用集（文政三年蘭山自叙、同六年刊）④⑤の部の植物の部に、

銀杏イデナ實ニ云 鴨脚イデナハ葉ニ云

とあり。尙又、谷口松軒著の魁本大字類苑（明治二十一年著者の子、谷口安定序文、同二十二年刊）の 以類 にも、

イテ……○銀杏、公孫樹○鴨脚イデナハ葉

イチ……○銀杏、枰仲、鴨脚子、公孫樹

とあり。是等の諸書に、イテフの名にあつるに鴨脚樹、鴨脚子を以てせるに因り、上記の如く試に今の支那音の ya chiao と對比すれば、一葉イチエフの約と見るよりも、鴨脚の支那音即ち廣義の唐音より來るものなりと見る方、當然の解釋なるべし。

これにつき近藤正齋の右文故事十六の慶長勅版考の條に、日本書紀神代卷二冊の事を記して、守重云、此活版匡郭尺寸字數、前ノ錦繡段ト全ク同ジ。……正保帝ノ下鴨鴨脚某へ恩賜ノ本モ此印文ナリ今ニ其家ニ傳フ。……

といへる文中の鴨脚といふ姓にも、イチヤウとよませたる事を聯想せり。而して又大正十三年四月二十二日の新聞に



唐音假名に據るを便利とす。且つ唐話纂要には、一更より五更に至るまでを載せたれども、唐音和解には、ただ二更まで記載し、其唐音は一更の文句にのみ附けたり。尙天明五年刊の唐來參和著の和唐珍解にも、一人物の「一更裡天。云々。」をうたひし所を叙せり。其唐音假名を見るに、唐話纂要の唐音と同じ。是れ即ち冠山の此著書が代表的唐音書として頗る廣く世に行はれしことを旁證するものといふべき也。

次に又曲樂少令（寫本一冊他書にも記さるゝ支那小曲十二篇とともに「譯師清河又彥所傳の曲樂四篇を載せたり。安政七年○改元萬延元年の寫本なり）にも、同様の曲を記したり。但し題目及び文句の唐音少しく異なるのみ。

關ナケ五ウ更コシ

一更裏イコシリイテシ天テン再サ月グハツ照シヤウ紗サ窓サウ人ジン也エ未ミ了リヤウ眠ミン云々

（因に記す、此醉胡蝶五更の小俗曲につきて聯想するものは、近代支那の五更調なり。支那の新聞雜誌によれば、前清朝倒れて中華民國の成立せし時には、民國五更調あり。袁世凱の帝制問題の時には警世五更調あり。阿片禁煙については、戒煙五更調あり。演劇の流行には、戲名五更調あり。活動寫眞の流行には影戲五更調あり。之を支那留學生に質問すれば、此五更調は卑俗にして曲調の簡單なるが爲に市井に流行盛唱せらるるといふ。

徳川時代の初世に近き元祿時代早く之を傳へて、一種の替歌上記の如きものゝうたはるゝに至りしも、畢竟卑俗にして曲調の模倣し易きものありしに由るなるべきも、唐音そのまゝに近き文句を以て始めるを以て注意すべきことゝすべし。尙近代支那の民國五更調の曲は、唐話纂要及び唐音和解に記載せらるゝものと、やゝ異なり、文句の間に呀呀得會といふ文句を挿入す。支那音 yayaté (tai) kui (wei, hwei) なり。一種の合の手とかいふべきものならんか。）

（五）欠と甲とのカンの音につきて（特に欠カンにつきて）

カンといふ語に唐音起源のもの二ツあり。一を欠とし、一を甲とす。今前者につきて愚見を記さん。

カンは量目の缺損消耗をいふ。欠の字の唐音 *kuai* の轉じたるもの也。或は又欠の字の日本漢音のケンの轉じたるものと思はるゝ也。欠の字、往々缺の字に代用せられて、ケツと音讀するものもある、元來ケンの音なり。

さて岡島冠山の唐話纂要卷一に

欠情ケンシヤン プサタイタマシタ

とあり。中村平吾三近子の俗字指南車（享保十六年自序）に「欠立カンガツ」とあり谷口松軒著の魁本大字類苑（明治二十二年刊）のへの部に

耗<sup>ヘリ</sup> 米<sup>マイ</sup> カンマイ

とあり、カの部に

省<sup>カン</sup> 耗<sup>マイ</sup> ヘリマイ

とあり。是等のカンマイのカンは欠<sup>カン</sup>なるべし。又倭訓栞に「算にかんのたつといふは欠字也。短欠折欠など見ゆ」とあり。

又注意すべきは、木曾道中膝栗毛の中仙道加納驛の條に

彌「川留はいゝが、段々懷の内に欠<sup>カン</sup>がたつ<sup>ヤ</sup>には困り果る

とあるが如きものにして、欠の唐音語は頗る廣く行はれたりし也。

又キャンスイ（欠錢）俚諺集覽に「長崎にて金持たぬ人をいふ」とあり。是れは欠錢の唐音<sup>ケンセイ</sup>の轉訛したるものと看做すべきものなれば、益カンが立つなどといふカンも、欠の字の唐音より來れりとなす前説の穩當なるを認むべき也。

又カンカンといふ語あり。秤量を秤り調ぶるの義なり。其字は蓋し看欠にして、量目に缺損減耗あるや否やを看るの義なるべし。看々の二字も考へ得ることなれども、量目を秤り調ぶるに縁ある欠の字を用ひて、看欠<sup>カンカン</sup>としたる方穩當なるべし。